



文禄3(1594)年の
吉野山での花見マップ

家康をより知りたい方は
・三河武士のやかた(岡崎)
・静岡市歴史博物館
・浜松市歴史博物館
などがあります。



徳川家康の
吉野山花見マップ



緑が結んだ縁

牧野富太郎・徳川家康と吉野

解説シート

吉野山地名名鑑100周年
& 文禄3 20周年 特別展
プレイベント

【企画・展示】吉野歴史資料館 【会期】令和5年3月4日～7月30日 ※本紙作成には、イラストAC、カシ米尔3Dを利用しています。

2023年朝の連続テレビ小説「らんまん」の主人公・牧野富太郎(ドラマでの名前は槇野万太郎)、大河ドラマ「どうする家康」の主人公・徳川家康。この両者は、実は吉野町にもゆかりのある人物です。牧野富太郎(1862年～1957年)は高知県佐川町出身の植物学者。独学で植物学にとりくみ、「日本植物学の父」ともいわれ、自ら「植物の精」と称しました。日本各地を巡って1000種以上の日本植物を命名し、60万点以上の標本をのこしています。また、徳川家康(1543年～1616年)は今の愛知県三河市出身の戦国武将。織田信長との同盟を基軸に勢力を広げ、本能寺の変の後は豊臣秀吉に仕えます。秀吉の死後は征夷大将軍となり江戸幕府をひらいた人物です。この両者が奈良とどういう結びつきがあるのか、ご紹介します。



クズ
牧野富太郎が
園橋との関係
を記した植物



ツルマンリョウ
妹山等に生え
る植物。勝手
な採取は不可。



シロヤマザクラ
吉野山の桜。
植物種、木
毎に色が違う。

大正9年8月、関西での
牧野富太郎の足跡



富太郎に興味のある方は
・高知県立牧野植物園
・猿馬区立牧野記念庭園
・六甲高山植物園
などがあります。



大正9(1920)年の
牧野富太郎の足跡

牧野富太郎と奈良

牧野は近畿ともゆかりが深く、神戸市会下山に植物研究所をたてたほか、関西の植物研究者や植物団体と交流があったことが知られる。そんな中、牧野富太郎は確認できる限りで、生涯に10回奈良県を訪れている。

- 大正7年12月5日 奈良へ森嶋外の消息を正倉院門前に訪ね、奈良公園(都旅館)で宿泊。翌日、春日大社、若草山、二月堂、大仏殿を廻って電車に乗り、大阪へ。
- 大正8年10月19日～22日 若草山、春日山で植物採取。森野薬草園や奈良女子大学を訪問。
- 大正9年8月 吉野などを訪れる。
- 大正10年10月6日 春日山中で植物採取指導。大阪植物同好会で挙行。奈良公園で食し、大阪で泊まる。
- 大正10年11月25日 奈良女子大学と県庁を訪問
- 大正11年9月17日 大阪より玉寺で乗り換え、下田駅下車。二上山を登山し、植物採取を行う。
- 大正13年9月8日 十津川ほか新宮周辺で植物採集。
- 昭和2年7月27日 千早赤阪村を出発して金剛山で植物採取。その後、北宇智駅で電車に乗り、竹下氏宅へ。
- 昭和9年4月15日 大阪植物同好会員と吉野山へ向かう。吉野ホテルで泊まる。
- 昭和15年7月2日 妹山でツルマンリョウを採取。

徳川家康と奈良

家康と奈良との繋がりは大きく3つある。大坂冬の陣の最中、戦勝祈願のために漢国神社に甲冑奉納し、法隆寺に参拝したこと。今の斑鳩町出身の中井正清を取り立て、江戸城、名古屋城、駿府城などの建築に従事させたこと。そして、秀吉の吉野山花見に参加して吉野を訪れたことである。ほかに、伝承や議論等があるが割愛する。以下に、家康と奈良の関係を整理する。

- 天正10(1582)年 本能寺の変。家康、堺から脱出。
- 天正13(1585)年 豊臣秀吉、関白となる。
- 文禄元(1592)年 朝鮮出兵(文禄の役)。
- 文禄3(1594)年 徳川家康、吉野山の花見に参加。
- 慶長2(1597)年 2度目の朝鮮出兵(長慶の役)。
- 慶長3(1598)年 豊臣秀吉病没。
- 慶長5(1600)年 関ヶ原の戦い。
- 慶長8(1603)年 徳川家康、征夷大将軍となる。
- 慶長12(1607)年 駿府城用材を吉野などで調達。
- 慶長19(1614)年 大坂冬の陣。徳川家康、法隆寺等で戦勝祈願。叡臣方、郡山・龍田などに放火。
- 慶長20(1615)年 大坂夏の陣。
- 元和2(1617)年 徳川家康、死去。

それでは次のページから、牧野富太郎・徳川家康と吉野とのつながりについて、詳しく見ていく事にしましょう。



吉野で植物を調べた牧野富太郎

【おもな参考文献】

山本正江ほか編 2004 『牧野富太郎植物採集記録・明治・大正編』高知県立牧野植物園
山本正江ほか編 2005 『牧野富太郎植物採集記録・昭和編』高知県立牧野植物園
川端一弘 2021 『牧野富太郎の提言』『自然史』No.3, 川端一弘

牧野富太郎 (1862年 - 1957年)

吉野は江戸時代頃から様々な植物学者が訪れた場所でした。牧野富太郎も植物研究で吉野を訪れた一人で、大正9年～昭和15年の間に4回、吉野を訪れています。

①大正9年8月1日～8日

8月1日に吉野を訪れ、吉野山を出発して山上ヶ岳で植物を採取し、数日のあいだ洞川に滞在した。8月5日に吉野山へもって東南院で食事をつと、その日は大淀町で投宿している。その後、高取山、宇陀で植物を採取し、主に奈良市内に約1か月間滞在した。

②大正13年9月8日

新宮市周辺の調査の途中、十津川村を来訪している。

③昭和9年4月15日～16日

大阪植物同好会に参加し、吉野山で一泊する。

④昭和15年7月2日

大和上市駅で下車後、妹山でツルマンリョウを採取。

牧野富太郎と吉野にまつわる、ちょっと専門的なおはなし

吉野葛の由来は国産って、本当??

牧野富太郎は、遺稿となった『我が思ひ出』で、「クズは吉野の国産人が製して出したからいわれる」と記しています。しかし、昭和6年の『通俗植物講義集 第2巻』では「葛の由来は吉野の国産」説を伝説として紹介し、「他にもいろいろ説があるから、さう性急にホイコロと謂うわけにはゆきませんけれども」と述べています。なので、牧野富太郎は「葛の由来は吉野の国産」説を事実と断定はできない、と考えていたのではないのでしょうか。江戸時代の国学者・屋代弘賢も「国産」と葛とは、をのづから別なるべきとしなせる論弁なり」と指摘しています。吉野葛という言葉や国産が舞台の小説『吉野葛』もあるので、なんだか混乱しますね。

牧野富太郎はたくさんの著作をのこしているが、その中には吉野のことを言及しているものが散見されます。その中でも興味深いものを以下で2つ、ご紹介。

大正9年8月21日の大阪朝日新聞大阪版に「洞川に高山植物園を設けよ、吉野山には物産陳列館を(帝大講師牧野富太郎氏談)」との記事が掲載されている(川端2021)。同記事では、吉野の山々を「国土の精華」、高山植物を「神々しい姿」とたたえ、吉野群山の大きな誇りとして、高山植物園設置を提唱された。

※この時の提唱が影響したのか、昭和12年の紀元二千六百年記念事業の、吉野熊野国立公園の事業の一つとして、吉野山に吉野組歴史博物館(吉野神宮付近に計画されるも実現せず)が、大峯山麓に吉野群山高山植物園の建設が企画されていた。

昭和18年刊行の『植物記』にて、熱海に「熱海の適当な区域を撰んで一目千本といわれる吉野山の桜の様にこれを一と處へ載え大きな桜林を作るが要だ」と提案している。熱海を旅した時にヒガンザクラが咲いている様子をみて考えたようですが、もしかしたら昭和9年に吉野の桜を見て理想したのかもかもしれません。

※吉野山の桜はヤマザクラで、ヒガンザクラとも、現在、日本でもよく見られるツメイロシノとも異なります。

ツルマンリョウの学名について

昭和15年、牧野富太郎は果の許可を得て、国指定文化財となっていたツルマンリョウを妹山で採取しています。この日のことがよほど印象深かったのか、牧野富太郎は日記にこう記しています。

～類ひ無き蔓万両を御山なる妹山に採る。吾れ亦ある日～
牧野はこの数年前から、ツルマンリョウを気にしていたようです。大正12年に小泉源一郎氏がツルマンリョウの属名を ANAMATIA STOLONIFERA KOHZITZ (現在は MYRSINE STOLONIFERA(KOHzITZ.)) とした時、ANAMATIA を大名持神社からとったなら、ONAMOTAT とすべきと指摘しています。少なくとも大正12年の時点で、妹山のツルマンリョウを知っていたようです。

家康が吉野山で詠んだ歌



君が代は千年の春もよしの山
花にらざりの限りあらしな

神の前の花
うらやましくもすめる神垣

滝の上の花
水速遠き滝の白浪

花の色は春より穠も忘れぬや
花を散らさぬ風

待らかねる花も色香を現して
咲くや吉野の春風の音

背景：吉野山図(館蔵)

徳川家康と吉野山との最大のつながりは、やはり吉野の花見でしょう。文禄3年2月、豊臣秀吉は公家・武将・歌人・僧侶らを連れ、吉野山へ花見に訪れました。家康のほか、豊臣秀次、今出川晴季、日野輝賢、前田利家、宇喜多秀家、伊達政宗、織田信雄、細川幽斎、小早川秀秋、飛鳥井理枝、沼田、聖護院道澄らが参加しました。

この時、一行は京都出発組(秀次一行)と大阪出発組(秀吉一行)に分かれて吉野を目指したようです。京都出発組が奈良に着いた時、「お供衆は誰も金銀をちりばめ、金銀細工や薄絨綾以下雑織を着て光っていた。3,000人ほどいるだろうか」という様子だったといえます。また、大阪出発組については、「昨日(25日)、當麻まで太間。人数5,000人ほどこれあり」と記録が残っています。

直前まで吉野山の寺々は準備におわたらしく、竹林院などは畳糸が足りなくなり、25日に興福寺へ使

いを出しています。以下、花見の様子を見てみましょう。

【1日目】2月27日

吉野に到着。今の吉野神宮付近から吉野山へむかい、吉水神社まで順々に名所を見物。夕方より雨。秀吉は吉水院を、家康は福島院(現存せず)を宿としました。

【2日目】2月28日

雨。吉水院に諸大名や公家門跡が出仕。お茶会。

【3日目】2月29日

雨。歌会が催される。この日の夜、秀吉は聖護院道澄に雨がやまない理由を相談します。道澄は肉食が原因と答え、これを聞いた秀吉はすぐに料理番を呼び、肉の提供を禁じました。その上で、明日雨がやまなければ火を放ち山を下ると冗談を言ったといえます。

【4日目】2月30日

晴れ。桜も満開となり、一行は花見を満喫した。この時、一行は思い思いに飯装を、各所に建てられた茶屋を楽しみながら、奥千本まで散策しました。家康も今出川晴季や前田利家と茶を楽しんだようです。

時は流れ、江戸時代に吉野山を支配した天海上人は、寛永寺(今の東京・上野)を建て、吉野の桜を植樹しました。以来、江戸の町で、吉野の桜が咲き続けたのでした。

※フランドルの都合上、日を省いています。

吉野で花を楽しんだ徳川家康

【おもな参考文献】

吉野町史編集委員会編 1972 『吉野町史』上巻、吉野町
楡谷昭彦ほか著 1996 『大関記』新日本古典文学大系(60) 岩波書店
小中川 百合子編 1997 『伊達政宗言行録-木村村右衛門見聞』新人物往來社
首藤善樹 2000 『金峯山寺史料集成』総本山金峯山寺



徳川家康 (1543年 - 1616年)